

やまたらけ

YAMADARAKE

FEBRUARY

No. 33

2009

早川町森林組合の仕事

早川町は、僅かな集落と周囲の耕作地を除き、そのほとんどが森林である。林業で潤った時代もあったが、木材価格の低迷とともに林業は衰退し、価値のなくなった林には手が入らず荒れ放題だ。しかし国土保全や地球温暖化防止の観点から、日本の森林が見直され始めているのもまた確かである。

このように、時代が大きく変わる中、これからの早川町の森林はどうあるべきなのか、まだどうしていくべきなのだろうか。

その答えを探すべく、今回は早川の林業を支える早川町森林組合に勤めて45年の長谷川空五（たかゆき）さんと、志を持ってここ10年の間に町外から早川町にやってきた現場職員の佐野さん、山田さん、加藤さん、石川さんに密着取材を試みた。

今の早川の林業の現場とともに、そこに携わる人たちが何を感じ、将来に向けて何を考えているのかをお伝えしたい。（遊佐敏彦）



写真上：事務所に前に集合。吐く息が白い。
写真左：雪の中を登る。無駄な体力を使わないよう、力任せな登り方はしない。
写真右：現場にあった造林事業の看板。

早朝7時前、森林組合の現場職員は既に作業着に着替えて、事務所の前で車のエンジンを温めていた。ここ10年の間に就職した若手の現場職員4人だ。

車で15分程度走り、車を降りたら弁当と作業に使う道具などが入ったリュックを2つ、背負子に縛り付け背負う。そこから徒歩で30分ほど山を登る。今日の作業現場は、事務所から比較的近い。ときには2時間も歩かなければならないこともある。

数日前に降った雪が、まだ残っている。ひとたび立ち止まると、足の裏から伝わる地面の冷たさは、雪深く険しい早川の山々を否応なしに感じさせる。

広葉樹から針葉樹へ 拡大造林がもたらしたもの

林業が盛んだったのは、戦後から昭和40年代半ばまで。早川町森林組合においても、当時は、国の方針で林業構造改善事業を行った。拡大造林といって、広葉樹林を針葉樹林に変える施策であり、多い年には200haぐらい植え付けをした。

地形や気候によって植える木の種類は変わり、例えば、高いところは寒さに強い唐松を植える。さらに、谷筋へ杉、平らなところへ檜、尾根へ赤松というように、いわば適地適木を行う。特に赤松は30年という短期で伐採ができ、パルプとしての質



平成16年にできた森林組合の新しい事務所。木材がふんだんに使われている。直売所も併設されており、森林組合で育つナメコなどが売られている。事務所には5名おり、うち1名も町外から来ている。他にナメコ工場に4名、現場職員も合わせて計13名の職員がいる。

がよく、しかも枝まで売れるため、利用価値が高いと考えられて当時はたくさん植林された。松食い虫が騒がれた後は、主に杉・檜が植えられた。

昭和40年から、森林組合で働いている長谷川空五さんは、当時をこう振り返る。

「日の出前に懐中電灯を持って山に登り、暗くなったら山を下りる。昼間は木材を出荷するためにひたすら現場で伐採と運搬を行う。先輩のやることを見よう見まねで覚える。当時の先輩は何でもできた。昔はほとんど全ての作業が人力で、危険度もいまより高かった。」

今回の現場は、昭和59年に杉と檜が植えられた場所。間伐と熊の皮むきを防ぐためのテープ巻きが作業だ。現場に着くと背負っていた荷物を下ろし、作業場所を確認し、早速作業に取りかかる。

林業の作業は非常に多岐にわたり、1伐採、2地こしらえ、3植え付け、4下刈り、5除伐、6枝打ち、7間伐という順番で行われる。しかし、現在は木材として出荷する作業はほとんどなく、山を管理する作業が主

事務仕事は夜。毎日夜中まで、請求書を出したり、お金の管理も全部やった。二晩徹夜したこともあった。」

町外から志のある若者を 受け入れる

早川町森林組合は、昭和38年に設立された。もともと早川町南部の旧村単位に昭和16年からあった森林組合を合併したものである。さらに昭和42年に早川町北部森林組合と合併し現在の形になった。

当時は森林組合が雇っている現場職員はおらず、8〜10人の個人やグループに、炭を焼く、丸太を出す、造林する、など様々な作業を請負体制で働いてもらっていた。

しかし、林業の衰退と共に、現場職員のなり手はいなくなり、高齢化が進んでいった。そこで、早川町森林組合では10年ほど前から、若手の職員を探すために、雇用保険付き、月給制、8時間労働など雇用条件を

整え、林業労働者全国支援センターと合同で募集した。(今年度も若手名を採用予定)

説明会への参加者は非常に多く、これまでに10人以上の若者を町外、県外から採用することができた。しかし、現実には厳しく、体をこわしたり厳しい仕事に耐えられず半数以上は辞めていった。

長谷川さんは、今の若者は昔に比べひ弱になったという。何でもすぐに質問したがる。一人前になるまでに昔の人よりはるかに時間がかかるのに、辛抱ができない。一方で現在残った4名の現場職員には、まだまだとはいえないものの、大きな期待を寄せている。

10年前、4人の中で最初にこの世界に飛び込んできた佐野さんも、最初は業界用語や道具の使い方もわ

からず、方言にも戸惑った。先輩の方から教えてくれることはまずないので、見て覚えるしかない。先輩に「木を伐つてもいいぞ」といわれた時は、とてもうれしかった。

4年前に、先輩達が辞めて、若手だけになった時大変だった。林業を始めて5年程度の自分がいきなりリーダーになった。でも、それがかえって良かったのかもしれないと今では思える。

危険とは常に隣り合わせ。常に次のことを予測しながら、自分を守り、仲間を守る立派なリーダーだ。

間伐の作業を間近で見ると、その迫力に圧倒される。チェーンソーのエンジンの音と、木を伐り裂く音が混じり合い、その後、大きな木が根本から一気に倒れる。



▲右の林が今日の現場。木が密集しており、光が入らない。



間伐作業。一本倒すのに、3分もかからない。ただ、檜は枝が強く折れづらいので、他の木に引っかかり一発で倒れない場合も多い。



伐る木を見定める。上は熊に皮を剥かれた木。こうなると売り物にならない。これを防ぐために、ビニールのテープをぐるぐると巻いていく。



林業という仕事は、作業を始めるときに、終わったときのイメージができていないとできないという。どの木を伐るかも現場職員の目に任される。

「熊が樹皮を剥いてしまったものは、いずれ枯れてしまうから伐る。材木として一番高く売れる根本の部分が曲がっているものもだめ。」一本伐っているときに、次に伐る木を見極める。木を見る目は、町外から来た現場職員にもしっかりと受け継がれているようだ。

←間伐後の林。一気に明るくなる。木の育ちも良くなるだけでなく、地表にも日が当たるために他の植物が生え、表土流出を防ぎ保水力を高めるとともに、多様な生態系が甦っていく。

間伐はどんどん進み、いままで真っ暗で草ひとつ生えていない林に、太陽の光が差し込んでいく。山が生き返った瞬間だ。

山の価値を どう作っていくか

1997年に京都議定書が議決されると、国からの要請が、木を伐り出して売ることから、地球温暖化を防ぐために森林を維持管理するということになっていく。京都議定書で定められた率の二酸化炭素削減を実現するために、管理されている森林を増やすことが主な目的である。除伐・間伐・枝打ちなど、手入れがきちんとされている森林が、二酸化炭素削減対象として計算されるためであり、本日の間伐も、そうした目的の補助事業を受けてやっている。



三菱自動車スポンサーとなり、林で三回、三菱自動車の社員やその家族が訪れ、作業する。



早川中学校の学校林整備事業。地元の子供達も、なかなかできない体験。



南部町にある百年の森。しっかりと手入れすれば、針葉樹の林でも、素晴らしい環境になる。



「マウント品川」でのマイタケの伏せ込み作業の様子。



長谷川さんは言う。「人間が生きていくための基礎になる物は何か。森林はその一つだ。森林は、酸素の工場であり、水の源だから。今は木が売れない時代だけれど、間伐をしなければ、地面が暗くなり草も生えず土壌もひ弱になる。そこに大雨が降れば、土砂が流出して川が荒れる。」

国土の維持管理と地球環境の保全両面から、1haでも多く健全な森林を育てて次世代に渡さなければ、という使命感がある。今後の森林の行方は予測しづらいし、今は価値がないかもしれないが、石油中心の社会が変わったときに、再び価値が出てくるかもしれない。だからこそ、今あるものをしっかりと管理して、必要なときに伐って出せるように準備しておく必要があると思う。日本は小さい島国で、ほとんどが山であり、それが資産だから。」

近年、早川町では三菱自動車のCSR（企業の社会的責任）活動による森づくり「パジェロの森」や、品川区民との交流の中で始まった「マウント品川」の整備事業等、企業がスポンサーとなったたり都会のボランティアが実施する森林整備が活発になってきている。また、早川中学校では、子どもたちが学校林を整備する取り組みも始まった。

森林組合も、こうした活動にインストラクターとしてよばれる事が増えている。

京島さんは「こういう事業はお金にはならんよ。でも、山や林業の事を少しでも知って関心を持ってもらいたい機会になるし、森林組合にはそういう使命があると思うのでやっている」という。

林業の現実には厳しい。木が売れた頃は山を打ち出の小槌のように考えていて、いざ売れなくなると、多くの人が山に背を向けた。しかし今は、志の高い若手現場職員や、企業経営者、ボランティアに参加する方々などが、再び山と向き合っている。そうした人々が互いに繋がり、より多くの人に伝わることで、山を守る必要性を感じる人たちは今後も確実に増えていくはずである。

思えば、社会が高度化する過程において、人間はその流れに合わせようと生き急いできただけなのかもしれない。そして山はその犠牲になった。しかし、時代の要請とともに、新たな価値が見出されつつ、厳しくも雄大な自然とともに生きていた人間本来の姿に戻ることが、求められているように思えてならない。

早川町と品川区の交流事業の中から始まった「マウント品川」の整備事業。2ヶ月に一回、品川区民が20名程度訪れ、登山道の整備などを行っている。長谷川さん(右)と京島さん(左:黒いシャツ)がする山の話に聞き入る参加者。

●森林組合で働くきっかけは？

佐野:10年ほど前、東京で普通のサラリーマンをしていた頃、新聞で海が汚れているという記事を読みました。それはつまり、山に手が入っていないから、川が汚れ、さらには海が汚れるということでした。林業の後継者不足も原因の一つということで、そこに自分が携わりたいと思いました。

●山仕事の醍醐味を教えてください。

加藤:山での作業は、簡単に見えても、実は難しく奥が深いです。少しずつですが確実に腕が上がります。でも、これで終わりというのがありません。そこが面白いです。

最初(植林)から最後(伐採)まで、一貫して関わられる仕事というのもいいですね。

石川:間伐前と後の林の明るさやきれいさなどの差を見ると、達成感があります。

山田:その日そのときのベストなやり方をその状況に合わせて考えます。大変だけど、それを年々覚えていくことは楽しいです。

●危険な目にあったりもするのですか？

佐野:枯れた木を切り倒すと、下の木に当たって自分の方へ跳ね返ってくる場合があります。それが急な斜面だったりすると、身動きが取りにくくさらに危険ですね。

加藤:一般の人の基準で危険なことを考えるとときがないけど、今現在ここにいる、ということは致命的な目にはあっていないということですね。

山田:熊らしいものと遭遇したりもしました。当時は霧で視界が悪かったので、はっきりとは見えなかったがすごく怖かったです。あとは石川君の切ってくる木が危ないです。たまにものすごく近くに倒してくるので、もしかしたらわざとやっているのかもしれませんが(冗談です)。

●これからの山に対する想い、

環境に対する考えを聞かせてください。

佐野:獣害が騒がれていますけど、それは里山がなくなったことが原因の一つだと思います。昔は人が住む集落と動物が住む山の間に見通しのよい里山があって、里山があれば、人と動物はお互いを遠くから見ることができます。結果として、動物は集落まで

寄って来ません。そういう里山の整備ができればいいですね。

山田:管理されていない山が多いことを、一般人、特に若者に知ってもらいたいですね。一過性の興味で終わらず、継続して関心を持ってもらいたいです。

お疲れの中、ありがとうございました。早川の山は、みなさんの肩に掛かっています。大変なお仕事だと思いますが、今後とも頑張ってください！

花嫁さん募集中♡

若手職員で唯一独身の石川さんが花嫁を募集しています！朝早く起きて、自炊して、洗濯して、弁当まで作るのも大変。そんな、石川さんの人生をまるごとサポートしてくれる奇跡的な女性はいませんか？

石川さん曰く、乙女座、天秤座の女性なら相性がいいはず。「まずはお話から」とのことですが、興味のある方はやまだらけ編集部まで連絡を！

●山田佳文さん
(39) 神奈川出身。
早川に来て2年。
かつては農業
を志したことも。

♡石川敦康さん
(32) 東京出身、
林業歴4年。メ
ンバー唯一の
独身。得意料理
は、ヘビ飯。

●加藤拓也さん(36)
京都出身、林業歴9年。
ご飯を炊飯器ごと食
べるので、奥さんが
泣いています。

●佐野治さん(41)
東京出身。森林組合に
勤めてはや10年。
一番の古株。

早川旬の直送便

ほろ苦い早春の味
春の訪れを告げる「ふきのとう」

寒い冬が過ぎ、春は着実に近づいてきているようです。地面からふきのとうが顔を出し始めています。山菜の苦味は冬のたまった脂肪を流し、味覚を刺激して一年の活動をスタートさせます。冬眠から目覚めた熊が一番最初に食べるのも「ふきのとう」だとか？

内容/100g、300gのどちらかお選び下さい。

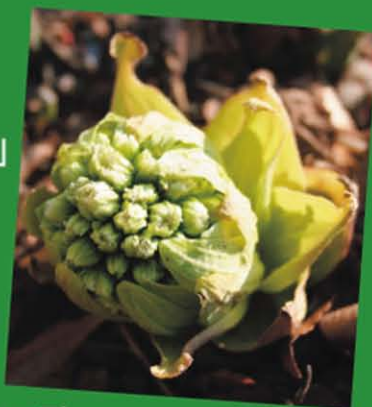
※100gで10個程度です。

価格/100g 700円(会員550円)、300g 1,800円(会員1,500円)

送料/740円

締切/3月9日(月)

発送/3月上旬から注文順に発送



■注文・お問い合わせ先

やまだらけ編集部

電話/0556-45-2101 (9:00~19:00)

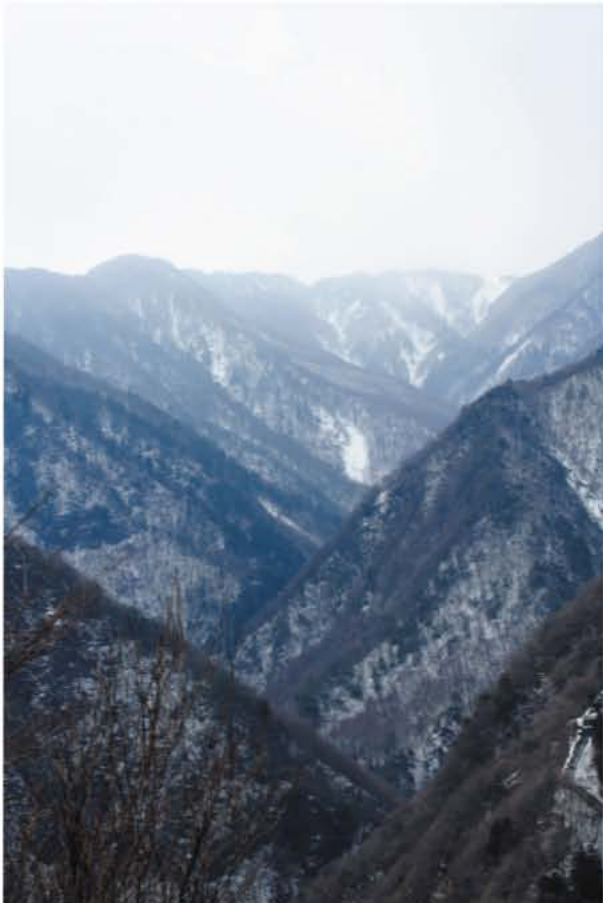
ファックス/0556-45-2268 (24時間対応)

メール/shop@joryuken.net (24時間対応)

いずれも、注文者氏名、住所、電話番号、お送り先氏名、住所、電話番号、商品名、数量をご連絡下さい。ファックス、メールでお申込の場合、折り返しご連絡いたします。3日経っても連絡がない場合は、お手数ですが電話でお問合せください。支払い、商品と一緒に請求書をお送りしますので、指定の金融機関へお振込みください。

会員とは、早川サポーターズクラブ、及びNPO法人日本上流文化圏研究所の会員のことです。今回ご紹介した商品の締切は12月25日(木)です。12月中旬より注文順に発送させていただきます。

早川町奈良田／奈良田越／井川 奈良田越（ならだこえ）



丸山林道から眺める奈良田越。中央のくぼみが峠。この日、奈良田の集落は晴れていたが、標高2000mを超す山の上は時雨れていた。



上：昭和20年代の林業作業の様子。材木は長いまま搬出し、屋根材や曲げ物の材料は山中で加工して運び出した。左：奈良田越の話を聞かせてくれた深沢作一さん。曲げ物職人だったおじいさんが使っていた道具を使って、竹とんぼやおぼこ人形（奈良田の民芸品）を作る。（撮影／大久保実香）

奈良田湖に注ぎ込む黒河内川南俣をさかのぼると、奈良田越の峠である。その先は静岡県の大井川上流域。奈良田越は、交易・交流などに使っていたというよりは、豊富な自然資源を利用するための道と言つてよいだろう。奈良田では、昭和20年代くらいまで焼畑を生業とし、農閑期に炭焼きや曲げ物作りなどの木工をして現金収入を得ていた。木工職人は、下駄、おひつなどを作っていて、時には、奈良田越を越えて井川まで材料を取りに行ったという。江戸時代にも、奈良田村の住人が尾根を越えて井川村の

領分まで行つて木を伐採していたらしく、井川村の役人からやめるよう手紙が来ている。この峠道の周辺には焼畑もあり、毎年、農作業を始める春になると、集落の皆で道を整備したそう。ほかに、奈良田越を通過して大井川へイワナを釣りに行つたとか、井川まで行つて屋根の材料の天然カラマツを伐つたとかいう話を聞いた。しかし、生活様式が変わつて自然資源に依存しなくなると、暮らしが成り立つようになると、奈良田越の道も使われなくなり、今はルートも正確にはわからなくなってしまった。



読者の声

●新倉の銀ブラ（そば祭りで実施）、良かったです。特に「雨乞い」をしたらパラパラと雨が落ちてきて驚きました。（芝川町、Sさん）

編集部：数年前のツアーでも、雨乞いをしたら雨が降りました。その効き目は本物と思わざるを得ません。もしかしたら、最近出番がないので水神様が寂しがっているのかも。

●（32号に掲載されていた）八重子さんは私の隣の娘さんでした。伝付峠を越えて二軒小屋まで、母と荷物を背負って一緒に行ったことがあります。架線のワイヤーロープを背負った人たちと、途中で出会いました。懐かしく思い出しました。（白岡町、Mさん）

編集部：おばあちゃんが勢いよく登場したので、関わりのある方が多かったようですね。知っている人が載っている、また面白かった、懐かしかったという声をたくさん頂きました。ありがとうございます。

伝付峠もなじみ深い峠だったようですね。

峠へのルートはありますが、所々危ない箇所があるようです。登山の際は、事前に早川町振興課（0556-45-2511）にお問い合わせ下さい。ちなみに、伝付峠の名前の由来、調べたのですが分かりませんでした。また、分かり次第ご紹介いたします！

■NEXT やまだらけ

34号特集（4月上旬お届け）

「雨畑硯にける想い」

早川町が世界に誇れるもの。その一つが「雨畑硯」です。雨畑硯は、その品質の良さから、中国の名硯、端溪（たんけい）硯にも匹敵するとも言われ、多くの書道家に愛用されてきました。

しかし、減りに墨と筆を使わなくなった現代、その需要はめっきり減り、硯職人もとうとう一人になってしまいました。次号では、そんな雨畑硯と、硯を後世に伝えようと奮闘する住民にスポットを当て、雨畑硯の今後を展望します！

豪華賞品？が当たる やまだらけクイズ！11

問：今号の表紙の写真に注目。右の現場職員（加藤さん）が腰にぶら下げている二丁差し（柄が二本出ている方）には、何が入っているのでしょうか？

答1、「カナヅチ」と「ドライバー」
2、「手裏剣」と「吹き矢」
3、「ノコギリ」と「ナタ」

正解者の中から抽選で3名様に、森林組合のナメコをプレゼントします！

前回のクイズの正解は、2の「エゴマ」でした。抽選の結果、市川さん（十和田市）、斎藤さん（栄村）の2名が当選しました。おめでとうございます！

今回は総投票数27通、うち正解者23名でした。

私は今まで早川町を研究目的で何度となく訪れたが、調査の特性上、歩いた場所はほとんどが集落内であった。しかし今回の取材を通して、早川という山深い地域の自然の息吹を違った視点から感じることができた。あたかも山全体が呼吸しているかのような感覚。そして、うまく呼吸させるためには、人間の知恵と愛情による丁寧かつ持続的な手入れが必要なのも改めて実感した。

山を覗けば宝の山
【やまだらけ】

発行元／フィールドミュージアム運営委員会
住所／山梨県南巨摩郡早川町茶袋430 〒409-2727
電話／0556-45-2160 ファクシミリ／0556-45-2268
ホームページ／<http://www.town.hayakawa.yamanashi.jp/fm/>